

学識経験者意見

専門の学識経験者により、「遺伝子組換え生物等の使用等の規制による生物の多様性の確保に関する法律」に基づき申請のあった下記の遺伝子組換え生物等に係る第一種使用規程に従って使用した際の生物多様性影響について検討が行われ、別紙のとおり意見がとりまとめられました。

- 1 除草剤グリホサート耐性トウモロコシ (*mEPSPS, Zea mays* subsp. *mays* (L.) Iltis) (GA21, OECD UI:MON-ØØØ21-9)
- 2 除草剤グルホシネート耐性及びチョウ目害虫抵抗性トウモロコシ (*pat, cry1Ab, Zea mays* subsp. *mays*(L.) Iltis) (T25 × MON810, OECD UI : ACS-ZMØØ3-2 × MON-ØØ81Ø-6)
- 3 除草剤グリホサート耐性及びチョウ目害虫抵抗性トウモロコシ (*mEPSPS, cry1Ab, Zea mays* subsp. *mays*(L.) Iltis)(GA21 × MON810, OECD UI : MON-ØØØ21-9 × MON-ØØ81Ø-6)
- 4 チョウ目害虫抵抗性及びコウチュウ目害虫抵抗性及び除草剤グルホシネート耐性トウモロコシ (*cry1F, cry34Ab1, cry35Ab1, pat, Zea mays* subsp. *mays*(L.) Iltis) (1507 × 59122, OECD UI : DAS-Ø15Ø7-1 × DAS-59122-7)

1 (略)

- 2 名称：除草剤グルホシネート耐性及びチョウ目害虫抵抗性トウモロコシ (*pat, cry1Ab, Zea mays* subsp. *mays*(L.)|Itis) (T25×MON810, OECD UI : ACS-ZM003-2×MON-00810-6)

第一種使用等の内容：食用又は飼料用に供するための使用、栽培、加工、保管、運搬及び廃棄並びにこれらに付随する行為

申請者：デュポン(株)

本スタック系統トウモロコシは、従来の交雑育種法により、除草剤グルホシネート耐性トウモロコシ(ACS-ZM003-2)とチョウ目害虫抵抗性トウモロコシ(MON-00810-6)を交配して作出されたものであり、これらの親系統については、生物多様性影響評価検討会において、個別に、本スタック系統トウモロコシと同一の第一種使用等をした場合に生物多様性影響が生ずるおそれはないと判断されている。

ACS-ZM003-2由来のグルホシネート耐性遺伝子*pat*がコードするPAT蛋白質は基質特異性が高く、MON-00810-6由来のチョウ目害虫抵抗性遺伝子*cry1Ab*がコードするCry1Ab蛋白質は酵素活性を持たないことが報告されている。したがって、*pat*と*cry1Ab*が付与する形質が相互に影響を及ぼす可能性はないと考えられる。

なお、本スタック系統トウモロコシにおけるPAT蛋白質、Cry1Ab蛋白質の発現量が、ACS-ZM003-2及びMON-00810-6におけるそれぞれの蛋白質の発現量とほぼ同等であることがELISA法による蛋白質の分析により確認されている。また、本スタック系統トウモロコシのチョウ目害虫抵抗性については、ヨーロッパアワノメイガ(*Ostrinia nubilalis*)を用いた生物検定により、MON-00810-6と同程度であることが確認されている。

以上より、本スタック系統トウモロコシについては、親系統が有する形質を併せ持つこと以外に評価すべき形質の変化はないと考えられる。

(1) 生物多様性影響評価の結果について

競合における優位性

本スタック系統トウモロコシは、ACS-ZM003-2由来の除草剤グルホシネート耐性及びMON-00810-6由来のチョウ目害虫抵抗性を併せ持つ。しかし、グルホシネートが自然環境下で選択圧になることはないと考えられ、また、チョウ目害虫による食害はトウモロコシが我が国の自然環境下で生育することを困難にさせる主な要因ではないことから、これらの性質は共に競合における優位性を高める性質ではなく、従って、本スタック系統トウモロコシが親系統よりも競合において優位になることはないと考えられる。このことから、競合における優位性に起因する生物多様性影響が生ずるおそれはないとの申請者による結論は妥当であると判断した。

有害物質の産生性

本スタック系統トウモロコシは、ACS-ZM003-2由来のPAT蛋白質産生性及びMON-00810-6由来のCry1Ab蛋白質産生性を併せ持つ。Cry1Ab蛋白質はチョウ目昆虫に対する殺虫作用を有するが、一方、PAT蛋白質は動植物に対する有害物質ではないことが確認されていることから、本スタック系統トウモロコシは両蛋白質を併せ持つとしても、その有害物質の産生性が親系統よりも高まることはないと考えられる。このことから、有害物質の産生性に起因する生物多様性影響が生ずるおそれはないとの申請者による結論は妥当であると判断した。

交雑性

我が国の自然環境中にはトウモロコシと交雑可能な野生植物は生育していないことから、影響を受ける可能性のある野生植物は特定されず、交雑性に起因する生物多様性影響が生ずるおそれはないとの申請者による結論は妥当であると判断した。

(2) 生物多様性影響評価書を踏まえた結論

以上を踏まえ、本スタック系統トウモロコシを第一種使用規程に従って使用した場合に、生物多様性影響が生ずるおそれはないとした生物多様性影響評価書の結論は妥当であると判断した。

3 ~ 4 (略)

(参考)

生物多様性影響に関し意見を聴いた学識経験者の名簿

(五十音順)

氏名	現職	専門分野
いで ゆうじ 井出 雄二	国立大学法人東京大学大学院農学生命科学研究科教授	森林遺伝・育種学
いとう もとみ 伊藤 元己	国立大学法人東京大学大学院総合文化研究科助教授	保全生態学
おおさわ りょう 大澤 良	国立大学法人筑波大学生命環境科学研究科助教授	植物育種学
おのざと ひろし 小野里 坦	株式会社松本微生物研究所技術顧問 水産資源開発プロジェクトリーダー	水界生態学・生命工学
こんどう のりあき 近藤 矩朗	帝京科学大学理工学部教授	植物環境生理学
さとう しのぶ 佐藤 忍	国立大学法人筑波大学生命環境科学研究科教授	植物生理学
しまだ まさかず 嶋田 正和	国立大学法人東京大学大学院総合文化研究科教授	保全生態学
たかぎ まさみち 高木 正道	新潟薬科大学応用生命科学部学部長	微生物遺伝学
たけだ かずよし 武田 和義	国立大学法人岡山大学資源生物科学研究所長	育種学
なかじま こうすけ 中島 暁介	日本大学生物資源科学部教授	育種学
なかにし ともこ 中西 友子	国立大学法人東京大学大学院農学生命科学研究科教授	植物栄養学
はやし けんいち 林 健一	OECDバイオテクノロジー規制的監督調和作業部会 副議長	植物生理学
はらだ ひろし 原田 宏	国立大学法人筑波大学名誉教授	植物発生生理学
ひび ただあき 日比 忠明	玉川大学学術研究所特任教授	分子植物病理学
よご やすひろ 與語 靖洋	独立行政法人農業環境技術研究所化学環境部有機化学 物質研究グループ長	雑草学
わしたに いづみ 鷺谷 いづみ	国立大学法人東京大学大学院農学生命科学研究科教授	保全生態学